

第4講 官僚制的テクノロジー

「2 空飛ぶ自動車と利潤率の傾向的低下」(pp.149-210)

『官僚制のユートピア—テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則』

デヴィッド・グレーバー著 酒井隆史 訳 以文社 (2017年)

テーゼ

1970年代に、今とは違う未来の可能性と結びついたテクノロジーへの投資から、労働規律や社会的統制を促進させるテクノロジーへの投資の根本的転換が始まったとみなしうる。

アンチテーゼ

とはいえ、莫大な資金を得ている科学やテクノロジーの領域すらも、元々期待されていたブレイクスルーをみていない。

ジンテーゼ

詩的テクノロジー (Poetic Technologies) から官僚制的テクノロジー (Bureaucratic Technologies) への移行について

2015年になっても空飛ぶ車がないということ

- フォースフィールド、テレポーション、反重力場、トライコーダー、トラクタービーム、不老不死の薬、人工冬眠、アンドロイド、火星の植民地
=かつての資本の時代における機械装置による興奮
- 私たちの時代のテクノロジーは、もはや同じ表象の能力を持っていない
- かつてはテクノロジー自体の物理力そのものが前進する歴史の感覚を人に与えていたのに対して、今や人はスクリーンとイメージの戯れに還元されてしまっている (p.159, 1.8-9)
- ジェイムソンの提起した「ポストモダニズム」は、1972年にエルネスト・マンデルが「第三のテクノロジー革命」と呼んだ資本主義の新段階に対応する文化論理を示すため【マンデル】(p.159-160)
 - o 人類は農業革命や産業革命に匹敵するほど深遠なる変化の端緒に立っている
 - o コンピュータやロボット、新エネルギー源、新情報テクノロジーなどが、実際に、旧式の産業労働にとって変わる
 - o やがて「労働の終焉」と呼ばれるようになる
 - o 私たちは誰もがデザイナーやコンピュータ技術者になって、クレイジーな(イカした)ヴィジョンを捻り出し、そのヴィジョンにはサイバネティックに制御された工場によって生産されることで現実を見るであろう
- こうしたテクノロジー上のブレイクスルーは起きなかった (p.160)
→情報テクノロジーや輸送を組織化する新しい方法(例えば配送のコンテナ化)の普及によって、東アジアやラテンアメリカ、それ以外への国々へと、旧態依然なる産業分野の職種のアウトソーシングが可能になった

=それらの国々では安価な労働力が使えるために、国内よりもはるかにテクノロジー的には遅れた生産技術でもやっていける

=重工業のますますの消失

→仕事は、サービス労働者からなる底辺層と、殺菌された生氣乏しい部屋でコンピュータを操作する上位層とに分割されるように

…このような新たなポスト労働文明なるもの総体が基本的にどこか問題を孕んでいるのではという不穏な意識が張り付いている

EX)ハイテクスニーカーはメキシコなどの農民の娘が古典的なミシンで塗っている

なぜ、誰もが予期していたテクノロジー的成長の爆発は、実現しそこねたのか？ (p.161)

(1) テクノロジー的变化のペースについての私たちの予想が現実的ではなかったという可能性

→なぜ多くの知性ある人々が、この問題に関してのみ、外した予想をしてしまったのか？

(2) 私たちの予測そのものは、基本的に非現実的であったわけではないという可能性

→何がテクノロジー的発展の進路を狂わせてしまったのか？

- 1950年代や1960年代に、早くもテクノロジー的イノベーションのペースは、20世紀の前半の猛烈なペースからすると減速を始めていたと信ずるべき理由がある

←→トフラー『未来の衝撃』(1970)：テクノロジー的变化のペースはコントロール不能なまでに恐ろしく加速している

○ 1970年ごろ、(1685年から15年ごとに二倍であった)世界で刊行された化学論文の数の上表は横ばいになった

○ 著作と特許も上記同様

○ それ以外のエリアで言えば、成長は単に減速したのではなく完全にストップした

○ 人間が移動するトップスピードも停滞・減速

- 『未来の衝撃』の主張は、保守主義の定義そのもの (p.168, 1.8)

=進歩は常に、解決の必要な問題として提示される

=表向き民主主義的な統制を制度化することが、解決策

→ここでの「民主主義的」が、実質的には「官僚制」を意味していることは明らか

=どの発明が支持されるべきであり退けられるべきであるかを決定する、専門家のパネルの創設

- 『未来の衝撃』やギルダー『富と貧困』(1981)の著作の成功

→提起された争点が権力の最上位者に受容されたことを示唆する

=今のテクノロジー的発展のパターンは社会的混乱を招くであろうという懸念、それが既存の権威の諸構造を脅かすことのないような方向にそのテクノロジー的発展を導きたいという欲求

- 予期されたテクノロジーが実現しなかったことを裏打ちするよう作用した多数の要因について考察
 - (1) 政治的要因：研究への資金援助の配分における意識的転換に関わる
 - (2) 官僚主義：科学・テクノロジー研究を管理運営するシステムの性格における変化

テーゼ (pp.171-172)

1970年代に、今とは違う未来の可能性と結びついたテクノロジーへの投資から、労働規律や社会的統制を促進させるテクノロジーへの投資の根本的転換が始まったとみなしうる。

- 米国とソ連の対比：ソ連のテクノロジーの進歩が凄まじかった点について
 - 具体例『スタートレック』
 - (スタートレック HP <https://paramount.jp/startrek/>)
 - (Wikipedia にざっくりとしたストーリーがあります
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%AC%E3%83%83%E3%82%AF>)
- (p.177-178)
- 連邦の政治機構への問いが起きなかった（ただ、これが民主主義ではないとは言いきれなかった）
 - （話の中に）民主主義を示唆するものが存在しないというのみならず、その不在に誰も気がついていないように見える
 - 政治的問題が生じると、事態への対応のために送られてくる人物たちは、例外なく官僚であり、外交官であり、公務員である
 - 『スタートレック』の登場人物たちは、いつも官僚たちには不平を漏らしてやまないが、政治家について不平を漏らしたことはない。政治的問題への取り組みは常に、行政的手段によってのみ行われる
 - 惑星連邦は、完全に絶対的である、壮大な成功を達成したレーニン主義である
 - 経済システムは、明らかにコミュニズム体制のもとに暮らしている
- ソ連の崩壊＝市場の勝利と解される (p.181)
 - ＝資本主義はようやく自由に、その正常で脱中心化された自由市場の要請に持ってこられた、テクノロジー的発展の路線に回帰した
 - ←しかし、これは明らかに間違っている
 - 民間セクターで行われた真にイノベーティブである研究の総量の減少
 - …課税の仕組みの変化が原因の一つ（減税や金融改革は結果として生産力の上昇を阻害した）
 - アメリカ合衆国は大規模な国家統制によるテクノロジー開発のスキームを手放さなかった
 - …宇宙開発のような文民プロジェクトから軍事研究に大幅に重点を移しただけ

→軍事プロジェクトは民生転用をもたらす（例：インターネット）が、発展が極めて特殊な方向に誘導される

- 研究開発 R & D の情報テクノロジーや医療への重点移動すらも、市場に従って消費者の要請に方向を変えたというよりも、ソヴィエト連邦をテクノロジー的に退けたのに続いて、世界レベルでの階級闘争において完全勝利を達成しようとの、徹底した取り組みの一環であるとも言える（p.184）

→新規に現れたテクノロジーの性格は、ほとんど全て、監視、労働規律、そして社会統制に最も適したものだ

- ネオリベラリズム…資本主義が唯一可能な経済システムであるような見せかけを形成するであろう行動様式を選択し続けてきた（p.185）
 - 雇用の安定性を突き崩しながら労働時間を上昇させるといったやり方がより生産力ある（イノベティブ・献身的）労働力を形成するであろうか？
 - 一方で、労働を脱政治化することは成功を取めてきた
 - 軍隊・警察・民間セキュリティーサービスの急成長も同様に不生産的＝資源の浪費以外なものでもない

アンチテーゼ

とはいえ、莫大な資金を得ている科学やテクノロジーの領域すらも、元々期待されていたブレイクスルーをみていない。（p.186）

- 何十億ドルと注ぎ込まれているはずなのに、いまだに光線銃は実現していない
 - コンピュータも医療も、ブレイクスルーしていない
 - 研究資金の諸水準相対が劇的に増加している
 - ←→100年前、人類が馴染んできた、そして予測もしてきた次々と継起する思考改革（遺伝子、相対性理論、精神分析、量子力学）のようなものが、もはやみられないのは確かであるのはなぜか？
 - 資金提供者が基礎研究を行うときに「ビックサイエンス」に押し込むから
例：ヒューマン・ゲノム・プロジェクト
→こうしたプロジェクトを囲む誇大広告と政治的資金は、今や基礎研究ですら、政治的、行政的、マーケティング的要請に従って動かされている、その度合い（の高さ）を示してお理、革命的な出来事をなの一つ起きなくさせているように思われる
 - シリコンバレーやインターネットの神話的起源に抱かれている幻惑
 - 研究や開発は、今や活力のある起業家たちの小チームや、オープンソースのソフトウェアを創造しているある種の脱中心化した協働によって主に推進されている
 - ←→研究の動いている方向は未だ、巨大な官僚制プロジェクトによって推進されている…変化したのは官僚制の文化：政府、大学、私企業の相互浸透
- EX) マーケティングと PR が、大学生活のあらゆる側面を吸収しつつある

- その結果、想像力や創造性の実現を芽のうちに摘むことを目指しているとしか思えない環境のもとで、「想像力」とか「創造性」を高めることを謳う大量の書類が積み上がる、といった光景が現れた (p.192)
- アカデミアが、変わり者、図抜けた頭脳、浮世離れのための、社会の中の避難所であった時代が存在した。もはやそうではない。そこは今や、プロの自分売り込み人（セルフマーケッター）の領域である。変わり者、図抜けた頭脳、浮世離れにとって、今や社会の中には、一切の居場所がない。(p.193)
- 「互いに競争しながら、君たちが達成するであろう発見が確実であることを、私に説得したまえ、そのための時間は惜しむな、さもなくば資金の獲得は望めまい、と」
- 自然科学においては、経営管理主義の専制に、忍びよる研究結果の私有化が付け加わる
→データや調査にアクセスできない/“すでにあるアイデア”の実行を許さない
- 現在の停滞の時代は 1945 年以降に始まったように思う…アメリカ合衆国が世界経済の組織者として、最終的にかつ決定的に、イギリスにとって変わったとき
→大学や科学官僚たちの徹底した企業化により変人は解雇されていく

ジンテーゼ

詩的テクノロジー (Poetic Technologies) から

官僚制的テクノロジー(Bureaucratic Technologies)への移行について

- いまだかつて、世界史の中で、かくもペーパーワークに膨大な時間を注ぎ込んだ人間はいなかったと言えるだろう (p.201)
- 現代生活の大いなる逆説：ゾツとしない旧式の官僚主義的社会主義の崩壊と、自由と市場の勝利以降におきているということも理解されている
- 創造性が管理運営に奉仕すべく動員される (p.202)
=詩的テクノロジー (Poetic Technologies) から官僚制的テクノロジー(Bureaucratic Technologies)への移行
 - 詩的テクノロジー：不可能であるような放縦な空想を実現させるための合理的・技術的・官僚制的手段の使用を意味している
※ほとんど例外なく、何某かの恐ろしい要素をはらんでいるのは確かである
 - 合理的・官僚制的テクノロジー：常に特定の空想的目的に奉仕している
- ソ連の計画は全て、詩的テクノロジーの絶頂を記している
- 今私たちの現実、詩的テクノロジーが官僚制的テクノロジーに奉仕するというその反転像である
- 空想は漂うままにとどまっていて、空想が具体的なないし物理的な形をとりうる（実現しうる）といったふりすら誰もしないということ
- オープンソースのインターネットソフトウェア開発のように、数少ない、自由で想像力のある創造性が実際に培養されている領域もある
→それとても、より多くのより効率的な書類作成のためのプラットフォームを作成するために動員されている
=官僚制的テクノロジー：管理運営の要請が、手段ではなく、テクノロジーの発展の目的となる、ということ

- この政治的ふくみとは？ (p.204)
 - 資本主義の性格についての私たちの最も基本的な想定のいくつかを根本から再考する必要がある
 - 資本主義とはいずれにせよ市場に等しく、それゆえ両者ともに国家の産物である官僚制とは敵対的であるということ
 - 資本主義はその本性からして、技術的に進歩的であるということ
 - 市場競争は資本主義の特性にとって本質的なものではなかった
 - …競争の大多数が、擬似独占大企業の官僚制的機構内部での内部取引という形をとるように見える現代資本主義の形態
- 資本主義が唯一可能な政治的・経済的システムとして語られる
 - 今の経済体制が可能な唯一の体制であると誰が本気で議論できるだろうか？
- 発明と真のイノベーションは、現代の企業資本主義の（あるいはおそらく形態はどうであれ資本主義の）枠内では生じないだろう (p.209)
 - 私たちの空想力をマネージャーやCEOが閉じ込めてきたスクリーンから解放し、私たちの想像力を再び人類史における物質的力になるようにしなければならないのだ

<コメント>

- まず、世界では「テクノロジーの目覚ましい進歩」が常套句になっていることに対して疑問を投げかけていることに驚いた。でも、確かに、空飛ぶ車はないし、そういう「想像」はファンタジーの世界へと押しやられるようになっていく。このことは、私たちがその不可能を感じ取ってしまっている裏返しなのだと思います。全ての“目覚ましい進歩”がいかに矮小であるか（つまり全てはスクリーンに閉じ込められた創造性であるということ）に気がつける気がした。
- どの技術が進歩すべきかが「労働規律」や「社会統制」と結びついているという議論は非常に納得するし、予想はできるが、さらに驚くべきはそれらの技術や軍事技術すらもブレイクスルーを起こしていないという点だと思う。確かに、特定の個人をレーザーで暗殺するとか、もっと陰湿で過激で真似されないようなテクニックやテクノロジーは開発されて「いるんだろうな」とはある種陰謀論的に語られることもあるが、それは陰謀論にとどまってしまっている（例えば数年前に、コロナワクチンにはマイクロチップが入っていて、それを体内に入れられる…など噂が立ったが、そんなことを予測させるような技術がないため、多くの人は間に受けることがなかったように思う）。当然、これらは倫理的に実現させてはならない類であるが、どうしても実行したいとする権力や金や資源をもってさえも実現できないのであれば、それは相当な説得力を持った「テクノロジーが発達しない社会構造の問題」と言えると考えた。
- 創造性を、創造性を縛るために働かせるという言葉では矛盾するような実態だが、非常に馴染み深い。もっと違う次元での創造性を生むには、どうすれば良いのだろうか…。